# 「グシュメーシュヴァラ・ジョーティルリンガ」の縁起譚

## —『シヴァ・プラーナ』第４巻「コーティ・ルドラ・サンヒター」第32章和訳—

山　口　しのぶ

## １．はじめに

『シヴァ・プラーナ』*Śivapurāṇa* 第４巻「コーティ・ルドラ・サンヒター」*Koṭirudrasaṃhitā* には、「ジョーティルリンガ」（jyotirliṅga）と呼ばれるリンガを本尊とする12の寺院の縁起が述べられており[1)]、そのうち第32章および第33章は「グシュメーシュヴァラ（ghuśmeśvara）・ジョーティルリンガ」の縁起譚に充てられている。グシュメーシュヴァラ・ジョーティルリンガは、現在マハーラーシュトラ州に存在する「グリシュネーシュヴァル（ghṛṣṇeśvar）・ジョーティルリンガ」を指す[2)]。

『シヴァ・プラーナ』に述べられるグシュメーシュヴァラ・ジョーティルリンガの縁起は以下のとおりである。

> 夫スダルマーと妻スデーハーはシヴァ神の信者であったが、子供ができなかった。妻に説得され、夫スダルマーは妻の妹グシュマーを２番目の妻とする。第２の妻グシュマーは101個の土製のリンガを作って礼拝し、それらを池に投げ入れた。それに満足したシヴァ神の慈悲により、彼女は息子を得ることができた。しかしながら姉スデーハーは妹に嫉妬するようになった（以上『シヴァ・プラーナ』第４巻『コーティ・ルドラ・サンヒター』第32章要約）。
>
> スダルマーは妹の息子を殺して体を切り刻み、かつて妹がリンガを投げ入れた池に息子の身体を投げ入れた。グシュマーが礼拝したリンガを持って池に行きシヴァの名前を唱えると、息子は生き返った。姿を現したシヴァ神に、妹は「姉を守ってほしい、彼女の罪が

灰になるようにしてほしい」と願い、さらにシヴァ神にこの地に留まるよう頼んだ。シヴァは自分のリンガが「グシュメーシュヴァラ」と呼ばれ、この池は「シヴァ神の住処」（śivālaya）と呼ばれるだろうと語った（以上第33章要約）。

以上が「グシュメーシュヴァラ・ジョーティルリンガ」の縁起であるが、本稿においてはその前半部分第32章の和訳を試みた。和訳の際底本としたのは、以下の刊本である[3)]。

Rāmatej Pāṇḍey ed. *Śivamahāpurāṇam*, Caukhamba Vidyā Bhavan, Varanasi, 1986.

以下にテキストと和訳を示す。

## 2．『シヴァ・プラーナ』「コーティ・ルドラ・サンヒター」第32章和訳

sūta uvāca/

ataḥ paraṃ ca ghuśmeśaṃ jyotirliṅgam udāhṛtam/
tasyaiva ca sumāhātmyaṃ śrūyatām ṛṣisattamāḥ//1//

スータが言った。

さて、これからグシュメーシャ・ジョーティルリンガについて語ろう。
そのすばらしい偉大さについて、優れたリシたちよ、聞きなさい。

dakṣiṇasyāṃ diśi śreṣṭho girir deveti saṃjñakaḥ/
mahāśobhānvito nityaṃ rājate 'dbhutadarśanaḥ//2//

南方の場所には「デーヴァ[4)]」という名の非常に美しい丘があり
偉大な輝きをそなえた驚くべきその姿は、常に光を放っていた。

tasyaiva nikaṭe kaścid bhāradvājakulodbhavaḥ/
sudharmā nāma vipraś ca nyavasad brahmavittamaḥ//3//

まさにその丘の近くに、バラドゥヴァージャ[5)]の一族出身の
ブラフマンについてよく理解した、スダルマーという名の賢者が住んでいた。

tasya priyā sudehā ca śivadharmaparāyaṇā/
patisevāparā nityaṃ gṛhakarmavicakṣaṇā//4//
彼の愛するスデーハーは、シヴァ神の崇拝に熱中し
常に夫の世話を第一と考え、家事にも長けていた。

sudharmā ca dvijaśreṣṭho devatātithipūjakaḥ/
vedamārgaparo nityam agnisevāparāyaṇaḥ//5//
優れたバラモンのスダルマーは、神を供養し客人をもてなした。
常にヴェーダの道を第一と考え、アグニ神への奉仕（ホーマ）に専心した。

trikālasaṃdhyayā yuktaḥ sūryarūpasamadyutiḥ/
śiṣyāṇāṃ pāṭhakaś caiva vedaśāstravicakṣaṇaḥ//6//
日に３度のサンディヤー儀礼[6)]を行い、彼は太陽のように輝いていた。
またヴェーダとシャーストラに熟達した彼は、弟子たちを教授した。

dhanavāṃś ca paro dātā saujanyaguṇabhājanaḥ/
śivakarmarato nityaṃ śaivaḥ śaivajanapriyaḥ//7//
最上の施主である彼は富を持ち、また善良な人柄のシヴァ信者であり
シヴァ神の礼拝に常に喜びを感じ、［他の］シヴァ神の信徒たちに愛された。

āyurbahu vyatīyāya tasya dharmaṃ prakurvataḥ/
putraś ca nābhavat tasya ṛtuḥ syād aphalastriyā//8//
［バラモンとしての］任務を遂行し、彼の人生の長い年月が経ったが
彼には息子は授からず、息子のいない妻とともに季節が過ぎたのだった。

tena duḥkhaṃ kṛtaṃ naiva vastujñānapareṇa hi/
ātmanas tārakaś cātmā hy ātmanaḥ pāvanaś ca saḥ//9//
物事について理解していた彼は、そのことで苦しむことはなかった。
「自身を救うのはアートマンであり、自身を浄化するのもアートマンである」

ity evaṃ mānasaṃ dhṛtvā duḥkhaṃ na kṛtavāṃs tadā/
sudehā ca tadā duḥkhaṃ cakārāputrasambhavam//10//
そのように心を定めたので、彼は苦しむことはなかった。
一方妻のスデーハーは、息子が生まれないことに苦しんだ。

nityaṃ ca svāminaṃ sā vai prārthayad yatnasādhane/
putrotpādanahetoś ca sarvavidyāviśāradam//11//
彼女は息子が生まれるという目的のため、努力がむくわれることを
すべての知識に熟達した自分の夫に、常に頼んでいた。

so 'pi striyaṃ tadābhartsya kiṃ putraś ca kariṣyati/
kā mātā kaḥ pitā putraḥ ko bandhuś[7] ca priyaś ca kaḥ//12//
その時彼は妻を非難して［言った。］「息子が何をしてくれるのか。
誰が母で、誰が父、誰が息子で誰が親戚、そして誰が恋人なのか。

sarvaṃ svārthaparaṃ devi trilokyāṃ nātra saṃśayaḥ/
jānīhi tvaṃ viśeṣeṇa buddhyā śokaṃ na vai kuru//13//
妻よ、誰もが三世において自分の利益だけを一番に考えており、これ
については疑いがない。
おまえはすぐれた智恵をもってそれを知り、悲しんではならない。

tasmād devi tvayā duḥkhaṃ tyajanīyaṃ suniścitam/
nityaṃ mahyaṃ tvayā naiva kathanīyaṃ śubhavrate//14//
だから妻よ、おまえは確実に苦しみを捨てなさい。
品格のある振る舞いをする者よ、おまえは私にそのようにずっと言い
続けるな。」

evaṃ tāṃ sannivāryaiva bhagavaddharmatatparaḥ/
āsīt paramasaṃtuṣṭo dvandvaduḥkhaṃ samatyajat//15//
神への祈りに熱中する者は、そのように妻をなだめた後
大変満足し、相反する二者（息子が生まれるか否か）から生ずる苦し
みを打ち捨てた。

kadācic ca sudehā vai gehe ca sahavāsinaḥ/
jagāma priyagoṣṭhyarthaṃ vivādas tatra saṅgataḥ//16//
ある時スデーハーは隣人の家におしゃべりをしに行ったが
そこで隣人と会った彼女は言い争いになってしまった。

tatpatnī strīsvabhāvāc ca bhartsitā sā tayā tadā/
uktā ceti duruktyā vai sudehā viprakāminī//17//
妻はその友人に、女性の本来の性質という点で非難された。
賢明でありたいと思うスデーハーは、ひどい言葉でなじられた。

patny uvāca/
aputriṇi kathaṃ garvaṃ kuruṣe putriṇī hy aham/
maddhanaṃ bhokṣyate putro dhanaṃ te kaś ca bhokṣyate//18//
［隣人の］妻は言った。
「息子のいない人よ、あなたはなぜ威張っているの。私には息子がいるわ。
私の財産は息子が受け継ぐけれど、あなたの財産は誰が受け継ぐというの。

nūnaṃ hariṣyate rājā tvaddhanaṃ nātra saṃśayaḥ/
dhig dhik tvāṃ te dhanaṃ dhik ca dhik te mānaṃ hi vandhyake//19//
きっとあなたの財産は、王様が召し上げてしまうのは疑いがない。
子どものできない女よ。あなたは哀れだ。あなたの財産もあなたのプライドも愚かしい。」

sūta uvāca
bhartsitā tābhir iti sā gṛham āgatya duḥkhitā/
svāmine kathayāmāsa tad uktaṃ sarvam ādarāt//20//
スータは言った。
彼女らに非難され苦しんだ妻は、家に戻り
言われたすべてのことを注意深く夫に話した。

brāhmaṇo 'pi tadā duḥkhaṃ na cakāra subuddhimān/
kathitaṃ kathyatām eva yad bhāvi tad bhavet priye//21//
その時もかの賢明なバラモンは苦しまなかった。［そして言った。］
「愛する者よ、言いたい事は言わせておけ。なるようになるだろう。」

ity evaṃ ca tadā tena hy āśvastāpi punaḥ punaḥ/
na tadā sā tyajad duḥkhaṃ hy āgrahaṃ kṛtavaty asau//22//
その時、夫によってそのように何度もなぐさめられたが
それでも彼女は苦しみを捨てられず、なされたことを主張した。

sudehovāca/
yathā tathā tvayā putraḥ samutpādyaḥ priyo 'si me/
tyakṣyāmi hy anyathā 'haṃ ca dehaṃ dehabhṛtāṃ vara//23//
スデーハーは言った。
「あなたは私の大切な方です。なんとかして息子が授かりますように。
最上の人よ。そうでなければ、私は死にます。」

sūta uvāca/
evam uktaṃ tayā śrutvā sudharmā brāhmaṇottamaḥ/
śivaṃ sasmāra manasā tadāgrahanipīḍitaḥ//24//
スータは言った。
最上のバラモンであるスダルマーは、彼女がそのように言うのを聞き
彼女の頑固な主張にうんざりして、心でシヴァ神を想起した。

agner agre 'kṣipat puṣpadvayaṃ vipro hy atandritaḥ/
manasā dakṣiṇaṃ puṣpaṃ taṃ mene putrakāmadam//25//
［シヴァ神の想起により］迷いがなくなったバラモンは、祭火の前に
二輪の花を落とし
右側の花が息子を与えてくれる花だと心で思った。

evaṃ kṛtvā paṇaṃ patnīm uvāca brāhmaṇaḥ sa ca/
anayor grāhyam ekaṃ te puṣpaṃ putraphalāptaye//26//

そのように賭けて、かのバラモンは妻に言った。
「息子という果を得るために、お前はその二輪の花のうち一輪を取りなさい。」

tayā ca manasā dhṛtvā putraś caiva bhaven mama/
tadā ca svāminā yac ca dhṛtaṃ puṣpaṃ sametu mām//27//
その時彼女は「私には必ず息子が生まれるだろう」と心で思い
「主人が［息子が生まれると］思った花よ、私のところに来い」と［言った。］

ity uktvā ca tayā tatra namaskṛtya śivaṃ tadā/
natvā cāgniṃ[8] punaḥ prārthya gṛhītaṃ puṣpam ekakam//28//
そのように言って、その時彼女はシヴァ神に敬礼し
礼拝をした後、祭火に願って一輪の花を取った。

svāminā cintitaṃ yañ ca tad gṛhītaṃ tayā na hi/
sudehayā vimohena śivecchāsambhavena vai//29//
シヴァ神の望みから生まれた迷いにより
かのスデーハーは、夫が考えたその花を取ることはできなかった。

tad dṛṣṭvā puruṣaś caiva niḥśvāsaṃ paryamocayat/
smṛtvā śivapadāmbhojam uvāca nijakāminīm//30//
それを見て男はため息をもらし
シヴァ神の蓮華のような足元を思い出し、自分の［息子を］望む［妻］に言った。

sudharmovāca/
nirmitaṃ ceśvareṇaiva kathaṃ caivānyathā bhavet/
āśāṃ tyaja priye tvaṃ ca paricaryāṃ kuru prabhoḥ//31//
スダルマーは言った。
「自在神によりすべては決められているのだ。他のことがどうして起ころうか。

愛する者よ、お前は望みを捨て主の礼拝をしなさい。」

ity uktvā tu svayaṃ vipra āśāṃ parivihāya ca/
dharmakāryarataḥ so 'bhūc chaṅkaradhyānatatparaḥ//32//
そのように言い、かの賢者みずからは望みを捨て
［自らのバラモンとしての］なすべき仕事を喜び、シャンカラの瞑想に夢中になった。

sā sudehā "grahaṃ naiva mumocātmajakāmyayā/
pratyuvāca patiṃ premṇā sāñjalir natamastakā//33//
［一方］かのスデーハーは頑固にも、みずからの望みから解放されずおじぎをして頭上で合掌し、愛情をこめて夫に言い返した。

sudehovāca/
mayi putro na cāstv anyāṃ patnīṃ kuru madājñayā/
tasyā nūnaṃ sutaś caiva bhaviṣyati na saṃśayaḥ//34//
スデーハーは言った。
「私には息子は生まれません。お願いですからもう一人妻を娶ってください。
その方には確実に息子が生まれることは疑いがありません。」

sūta uvāca/
tadaiva prārthito vai sa brāhmaṇaḥ śaivasattamaḥ/
uvāca svapriyāṃ tāṃ ca sudehāṃ dharmatatparaḥ//35//
スータは言った。
その時［妻に］願われた、シヴァ神を尊崇し務めに専心するバラモンは自分の愛するかのスデーハーに言った。

sudharmovāca/
tvadīyaṃ ca madīyaṃ ca sarvaṃ duḥkhaṃ gataṃ dhruvam/
tasmāt tvaṃ dharmavighnaṃ ca priye mā kuru sāmpratam//36//
スダルマーは言った。

「お前の苦しみも私の苦しみも必ず消えるだろう。
だから愛する者よ、今は私の務めの邪魔をするな。」

sūta uvāca/
ity evaṃ vāritā sā ca svamātuḥ putrikāṃ tadā/
gṛham ānīya bhartāraṃ vṛṇu tv enām idaṃ jagau//37//
スータは言った。
するとこのようにしかられた彼女は、自分の母親の娘（自分の妹）を家に連れてきて夫に言った。「この娘を娶ってください。」

sudharmovāca/
idānīṃ vadasi tvaṃ ca matpriyeyaṃ tataḥ punaḥ/
putrasūś ca yadā syād vai tadā spardhāṃ kariṣyati//38//
スダルマーは言った。
「わたしの愛する者よ、今またそんなことを言って。
しかしもし［その妹との間に］息子が生まれたら、お前は嫉妬するだろう。」

sūta uvāca/
ity uktā tena patinā sā sudehā ca tatpriyā/
punaḥ prāha karau baddhvā sudharmāṇaṃ patiṃ dvijāḥ//39//
スータは言った。
再生族の者たちよ、夫からこのように言われ、彼が愛するスデーハーは両手を合わせて、夫のスダルマーに再び言った。

nāhaṃ spardhāṃ bhaginyā vai kariṣye dvijasattama/
upayacchasva putrārtham imām ājñāpayāmi ca//40//
「再生族の中の最も優れた方よ、私は妹に嫉妬などいたしません。
息子が生まれるように、どうかこの妹を娶ってください。お願いです。」

ity evaṃ prārthitaḥ so 'pi sudharmāpriyayā tayā/
ghuśmāṃ tāṃ samupāyas taṃ vivāhavidhinā dvijaḥ//41//

スダルマーが愛する者にこのように頼まれ、かの再生者(スダルマー)は結婚の儀軌にしたがって、［妹である］そのグシュマーを妻に迎えたのだった。

tatas tāṃ pariṇīyātha prārthayāmāsa tāṃ dvijaḥ/
tvadīyeyaṃ kaniṣṭhā hi sadā poṣyā 'naghe priye//42//
そして再生者は彼女（グシュマー）と結婚し、さらに姉に頼んだ。
「この者はお前の妹だ。罪なき者、愛する者よ、常に彼女の面倒を見なさい。」

uktvaivaṃ sa ca dharmātmā sudharmā śaivasattamaḥ/
yathā yogyaṃ cakārāśu dharmasaṃgraham ātmanaḥ//43//
シヴァ神を尊崇し信仰心のあるスダルマーは、このように言って
みずからの義務を適切に、また速やかに行った。

sā cāpi mātṛputrīṃ tāṃ dāsīvatparyavartata/
parityajya virodhaṃ hi pupoṣāharniśaṃ priyām//44//
彼女（スデーハー）もまた、その妹に召使いのように仕えた。
敵意を捨て、昼も夜も愛する妹の世話をした。

kaniṣṭhā caiva yā patnī svasranujñām avāpya ca/
pārthivān sā cakārāśu nityam ekottaraṃ śatam//45//
［もう一人の］妻である妹もまた、姉が［夫からの依頼を］了承したことを受けとめ
すぐに101個の土製［のリンガ］を作った。

vidhānapūrvakaṃ ghuśmā sopacārasamanvitam/
kṛtvā tān prākṣipat tatra taḍāge nikaṭasthite//46//
［妹の］グシュマーは、先に［101個のリンガに対し］もてなしの供養を伴った儀礼を行い
近くの池にそれら［のリンガ］を投げ入れた。

evaṃ nityaṃ sā cakāra śivapūjāṃ svakāmadām/
visṛjya punar āvāhya tatsaparyāvidhānataḥ//47//
そのように彼女はその［シヴァ神の］礼拝の規則にしたがい、［シヴァ神を］送りだしたり
再び迎えたりしながら、自らの望みを叶えてくれるシヴァ神の供養を常に行った。

kurvanty ā nityam evaṃ hi tasyāḥ śaṅkarapūjanam/
lakṣasaṃkhyā 'bhavat pūrṇā sarvakāmaphalapradā//48//
彼女のシヴァ神への供養は常に行われ、10万回が成就したが
それは一切の望んだ結果を与えてくれる［回数であった］。

kṛpayā śaṅkarasyaiva tasyāḥ putro vyajāyata/
sundaraḥ subhagaś caiva kalyāṇaguṇabhājanaḥ//49//
シャンカラの慈悲により彼女には息子が生まれた。
［その息子は］美しく、幸運に恵まれ、すばらしい性質の持ち主だった。

taṃ dṛṣṭvā praramaprīto sa vipro dharmavittamaḥ/
anāsaktaḥ sukhaṃ bheje jñānadharmaparāyaṇaḥ//50//
ダルマを知るかの最上のバラモン（スダルマー）は、その子を見て大いに喜んだ。
執着しない者、知識とダルマを最終目的とする者は、幸福を享受した。

sudehā tāvad asyās tu spardhām ugrāṃ cakāra sā/
prathamaṃ śītalaṃ tasyā hṛdayaṃ hy asivat punaḥ//51//
一方スデーハーは、嫉妬ですさまじい顔になった。
彼女の心は最初は落ち着いていたが、再び剣のように［鋭く尖った］。

tataḥ paraṃ ca yaj jātaṃ kutsitaṃ karmaṃ duḥkhadam/
sāvadhānena manasā śrūyatāṃ taṃ munīśvarāḥ//52//
それから後、苦しみを与えるような蔑むべき行ないが生じた。
優れた賢者たちよ、そのことについて心して聞け。

iti śrīśivamahāpurāṇe caturthyāṃ koṭirudrasaṃhitāyāṃ ghuśmeśvaramāhātmye sudehāsudharmācaritavarṇanaṃ nāma dvātriṃśo 'dhyāyaḥ//

以上が、『吉祥なシヴァ・マハー・プラーナ』第４巻「コーティ・ルドラ・サンヒター」中の「グシュメーシュヴァラ［・ジョーティルリンガ］の偉大さ」における「スデーハーとスダルマーの所行の話」と名づける第32章である。

**注**

1）*Śivapurāṇa, Kotirudrasaṃhitā*, Ch.14-Ch.33。なおCh.1にはJyotirliṅgaとUpaliṅgaの名称などが述べられ、同プラーナ第３巻 *Śatarudrasaṃhitā*, Ch.24にも12ジョーティルリンガについて言及されている。

2）マハーラーシュトラ州に現存するグリシュネーシュヴァル・ジョーティルリンガについては、（山口 2008）（山口 2011）参照。また 'ghṛṣṇeśvara' の名称の由来について、Tourist Publication ed. *Bhagwan Shankar ke 12 Jyotirliṅgoṃ kī kathā*, Aurangabad（出版年不明）には、次の記述がある。シヴァの妃パールヴァティー女神が、sindūra（赤い粉）、kuṅkuma（黄色い粉）と Śivālaya の水を左手に載せ、右手で「擦り合わせる」（サンスクリットの語根は√ ghṛṣ）と、それらがリンガに変わった。これ以来彼女はそのリンガを「摩擦［から生じた］シヴァ神」（ghṛṣṇeśvara）と呼んだ。また（Vitekar 1991：８）にも類似の言及がある。

3）サンスクリット版本として他に *Śrīśivamahāpurāṇam*, Nag Publisher, 1981も参照したが、筆者の所有する版、およびインド、プネー市のバンダルカル東洋学研究所図書館が所蔵する版とも本稿で和訳した第32章のうち第34偈～第52偈を欠いていたため、Caukhamba 版を底本とし、Nag Publisher 版に掲載されている部分のみと比較対照した。なお英訳としては、*The Śiva-Purāṇa,* part 3,（*Ancient Indian Tradition and Mythology,* vol.3）, Motilal Banarsidass, 1988, Delhi を、さらにヒンディー語訳としては *Śivamahāpurāṇa*, Khemarāja Śrīkṛṣṇadās Prakāśan, Mumbai, 1999を参照した。

4）M. Monier-Williams, *A Sanskrit-English Dictionary* および（Dave 1970：47）によれば、'devagiri' は Daulatāvād の名称である。現在 Gṛṣṇeśvar 寺院のあるマハーラーシュトラ州 Ellora 地区付近には、Daulatāvād と呼ばれる丘が存在し、この偈の devagiri はその地域を指すと考えられる。

5）Bharadvāja とは（Stutley 1986：42）によれば、古代のアーリヤ系の牧畜を営む民族の名称であり、またその一族で聖仙（ṛṣi）となった者の名称を指す。さらに bharadvāja は 'bhara dvā-jam'（２人の父から生れた）という意味で、２人の父 Utathya および Bṛhaspati と母 Mamatā の子とされる。一方（Mani 1975：117-118）では、プラーナ文献において有名な Bharadvāja は、２人の父を持つ

Bharadvāja とは別人で、プラーナ文献に登場する Bharadvāja はインドラから長寿をさずかりヴェーダの学習に生涯を捧げたという。

6）バラモンが一日の昼と夜の「継ぎ目」(saṃdhyā)、すなわち「夜明け」(prātas)、「正午」(madhyāhna)、「日の入り」(sāyaṃ) に行う儀礼であり、ヴェーダの神々への礼拝、ガーヤトリー・マントラの読誦等が行われる。また（Kane 1977：1121)によれば近年の saṃdhyā 儀礼テキストにはヴェーダ起源でない nyāsa(布置)も含まれる。

7）Caukhamba 版では badhuś となっているが、Nag Publisher 版の bandhuś をとる。

8）Caukhamba 版では cāgni となっているが、Nag Publisher 版の cāgniṃ をとる。

**参考文献**

山口　しのぶ 2008「12ジョーティル・リンガ寺院について―マハーラーシュトラ州グリシュネーシュヴァル寺院を中心として―」『印度学仏教学研究』57号、pp.262-268.

山口　しのぶ 2011「光り輝くシヴァ神の聖地―リンガ寺院の神話と象徴―」『聖地と聖人の東西 起源はいかに語られるか』（藤巻和宏編）勉誠出版、pp.452-472.

Dave, J.H. 1970 *Immortal India*, Vol.3, Bharatiya Vidya Bhavan, Bombay.

Kane, P.V. 1977 *History of Dharmaśāstra*, Vol.5, Part 2, Bhandarkar Oriental Research Institute, Poona.

Kumar, Pushpendra ed. 1986 *Śivamahāpurāṇam*, Nag Publisher, Delhi.

Mani, Vettam 1975 *Purāṇic Encyclopaedia*, Motilal Banarsidass, Delhi.

Miśra Jvālā Prasādjī ed. 1999 *Śivamahāpurāṇa*, Khemarāja Śrīkṛṣṇadās Prakāśan, Mumbai.

Pāṇḍey, Rāmateja ed. 1986 *Śivamahāpurāṇam*, Caukhamba Vidyā Bhavan, Varanasi.

Shastri, J.L. ed. 1988 *The Śiva-Purāṇa*, part 3,（*Ancient Indian Tradition and Mythology,* vol.3）, Motilal Banarsidass, Delhi.

Stutley, Margaret and James Stutley 1986 *A Dictionary of Hinduism*, Heritage Publishers, New Dehli.

Tourist Publication ed. *Bhagwan Shankar ke 12 Jyotirliṅgoṃ kī kathā*, Aurangabad（出版年不明）

Vitekar, M.B. 1991 *Ellora*, Devasthan Trust, Ellora.